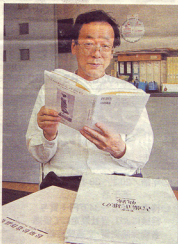


木彫を身近なものに感じさせ、表現の幅を広げたにもかかわらず、民芸品や土産品扱いされ、不遇の一生を終えた彫刻家・木村五郎(1899-1935)に光を当てた評伝『これは彫刻になっております』—木村五郎の彫刻とその生涯』がこのほど、星雲社から出版された。

不遇の彫刻家・木村五郎に光

美術史家・千田敬一^{さん}が評伝

読む・語る



『木村五郎の彫刻とその生涯』を著した千田敬一さん

著者は徳高町有明の美術史家・千田敬一さん(五七)。日本美術院彫刻部の系譜に連なる古藤正雄、松原松道ら無名彫刻家を調べ、評価し、著している千田さんならではの

著者は徳高町有明の美術史家・千田敬一さん(五七)。日本美術院彫刻部の系譜に連なる古藤正雄、松原松道ら無名彫刻家を調べ、評価し、著している千田さんならではの

の大きな成果だ。五郎の数奇(すうき)な生い立ちに始まり、関東大震災と窮乏、農民美術の普及に備州などに出向く、彫刻で生活するに

島あんど人形の製作、突如死まで克明に追った。千田さんは、五郎は関東大震災から日中戦争に至る、彫刻で生活するに

は非常に厳しい時代に生きかねばならなかったと

し、彼が書いた本を読むと、造形論をきちんと持っていたと見える。だから高村光太郎などは認めていたのだが、一般には各地の風俗をモデルにし、土産品と形が似ているという理由で、真面目な彫刻ではないとされた。

千田さんは大島で五郎を研究し、彫影する人たちの思いをくみつつ、美術の流れを踏まえて正當に五郎を評価した。

五郎の仕事は▽木彫の新たな可能性を示した▽農民美術の講習などで木彫の普及に努めた▽美術家の副業としての手工芸の発展に尽くした▽の三つが挙げられると記し、「現代ならアートとして認めるものが、通らなかった。当時彫刻と言われるものを造ろうと思えばいくらでも造れたが、それせず、身を持って表現した作家だったと思う」と話している。

A5判、二百二十三頁、千九百五円(税別)。問い合わせは伊豆大島木村五郎研究会(電話04992・2・16928)へ。